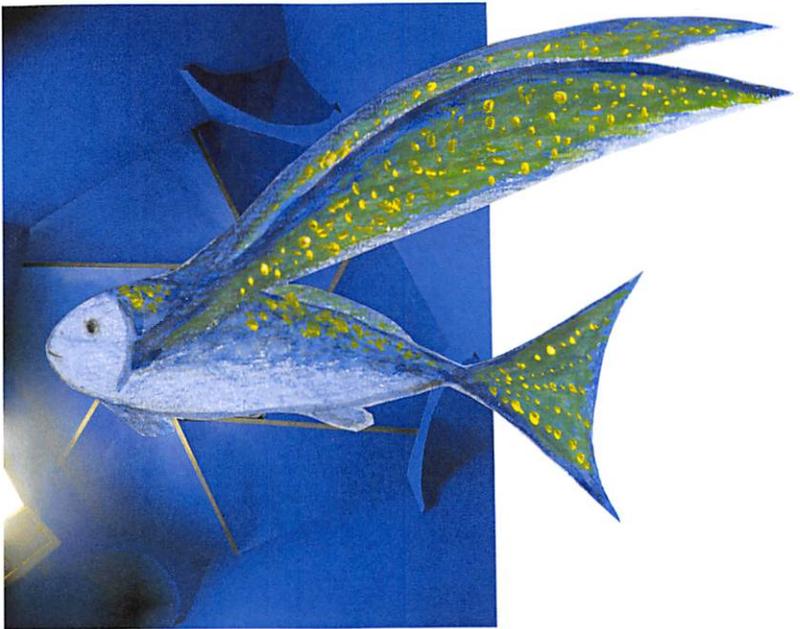


地中海

MARE MEDITERRANEUM

2018.3



平成30年3月1日発行(毎月1回1日発行)第66巻第3号

No.718

創刊理念

文化としての地中海、そうした概念が近代思想の郷愁として最近うかび上ってきた。それは、ローマでも、ギリシャでもなく、エジプトでもない。もっと古い発生的なものだ。別ないいかたをすれば、地中海的なクリマ、明朗で明るく、同時に人間的な感情とつよい同化力。あらゆる大陸の奥地から南下しました北上した、すべての未開なものを同化してきた大きな力、——それをホメロス以来ピカソでも、ブラックでも、シロニーでも、みなおなじ気持であこがれる。

源泉的精神の、本質的な方向を指向するもの、それが「地中海」である。

地中海

二〇一八年三月号（通卷七十八号）

◇今月の二十首詠……ハラスメント 玉井綾子 2

■作品 **A** 菊岡栄子・菊地栄子他 4

A 海保奈良繁他 20

B かがわじつお他 54

C 久保田歩他 70

A 西佐恵子他 86

■オリープ集 笠野洋他 46

◇今月の二人 岡野恵俊・山崎昭子 16

■香川進作品を詠む〈つぐみの歌〉 15

◆第一歌集の頃 浜谷久子・近藤芳仙・田中純子・中島彰代 42

■追悼・本木定子 八乙女由朗 44

木訥なひと

母、本木定子と地中海 柳川陽子・小田島裕子

■追悼・江口 久我田鶴子 45

短歌と国文学と

◇春のアンソロジー 〈哀歓〉 牧 雄彦 40

◇シルクロード・カフェ (責任編集) 木村文字 52

私と短歌との出会い (187) 寺尾妙子 19

■歌壇月旦 磯田ひさ子 75

名もなき歌人の存在

■一月号作品批評 76

A……………佐久間晟・関根和美

河上悦子・田中純子

B……………ふじとよひこ・川辺京子

C……………玉井綾子・近藤栄昭

オリープ集…茂木 斌・西堤啓子

今月の二人・作品評 久我田鶴子 18

第12期オリープ集メンバー 68

最近の歌誌より (編集部) 69

第66回地中海全国大会 (福島大会) ご案内 104

クリップ……… 103 神田通信………表3

(表紙デザイン) Tazuko Kuga

ハラスメント

玉井 綾子

上司らの笑顔と色を失わせ数字作りぬパワハラ店長

卑猥なる言葉について来られるか学生時代もセクハラありき

バブル期のパワハラ上司の住みし町「美しが丘」は未だにまぶし

言われているところを見るも見られるもハラスメント害 見ざる聞かざる

「パソコンや電気関係得意でしょ」文系男子の受けるセクハラ

母でなく父の付き添い求めくるロボット教室 子と参加する

通路にてわが視界から足早に去る人のあり 切れし釣り糸

職務ゆえ避けられるのだと自らの人間性を宥めてくるむ

昭和四十四年生まれ。
羊グループ所屬。
歌集に「発酵」がある。

堂々と他人のせいに出来る技「○○ハラスメント」を使え

ウイルスもハラスメントも名を付けることから始む対症療法

モラハラやマタハラ、パタハラ辞書になくネットでなければ調べられぬ語

ハラスメントの主役に口なし鑑定は言われし人の気持ちちが全て

パワハラになるかと危惧し注意すら出来ぬ上司は部下に甘える

不幸なる相性ゆえのこともあるハラスメントは絡まりし糸

朝起きて台所で受くる家事ハラや夫が使いしままなるコップ

「ママのバカ早く死んで欲し」小一の軽き言葉もずばりモラハラ

怒鳴りつけし子の眼球に現れる字幕「家庭内DVを問う」

明らかなハラスメントはなくなりて切られし草の根は下に伸ぶ

○ハラと言われそうだから言わぬだけ今も思わむ心の中で

学校のいじめなくせぬ世の中にハラスメントの消ゆることなし

作品

A

菊岡栄子

喪の葉書

・漣

友人よりかかりし電話に促され歌作らんとパソコンに向かう
 がんばると言いたるもののパソコンの中には未だ一首もならず
 年賀状の用意した頃喪の葉書までも届けり霜月の尽
 吾よりは年長の人の葉書何とはなしの変に納得
 家族葬の葉書もちて喪中となし何につけても諸式を省く
 告別式も知らざるままに一枚の葉書にて知る家族葬なり
 受け取りし喪中葉書の送り主繁忙の間の意中を計る

菊地栄子

シクラメン

・滝

一面に銀杏散り敷く黄の道その先にあれわがレストラン
 手を握りましてハグなどするものか学びし作法は今も身に付く
 束子かけ生薑ひとつを洗ってる樋口一葉を再び思う日
 指先が滑ってうまく捲かれないこのもどかしさがわれを僻めぬ
 朝まだき枕にひびくズズズと聞きなれぬ音は雪掻きらしも
 赤・ピンク・紫に白の丈低きシクラメンは今日も園に華やぐ
 ひえびえとメジロもスズメも鳴き交わす椎の木末を出で入りにつつ

草刈十郎

栗ごぼん

・世

ほんのりとお焦げの旨き栗ごぼん食べつつ深まる秋を思へり
 人生の終着近しを思ひつつひとり熟柿をもぎてゐるなり
 鳥渡る空見上げつつ今日ひと日時を惜しまず秋惜しむなり
 烏瓜今年も赤く色づけり色に迷ひのいささかもなく
 妻入院夜のしじまの独り居は言葉に飢えし夜長となれり
 わが過去の幸運不運を思ひつつひとり刈田の道を歩けり
 菜虫をばとりつつ思ふやがて野を舞ふ未来をわれ知りながら

國井節子

夫よ

・春

三食の代りに透けたる点滴を見るときもなしに見つめをる夫
 脳を病み肺を患ひ声も失せ心ひもじく眠れる夫よ
 重ね来し永き年月省みて至らぬわれには過ぎたる夫よ
 夫を置きて家路を急ぐ秋のゆふべ矢田山里を黄金に染めあぐ
 帰り来て一人の家の鍵を開け一人さみしく一人鍋する
 室生寺の里に求めし小さな持仏に祈れば仄かにかをる
 換気せむと開けたる窓の隙間より思はぬ風のパンチを受けたり

河野繁子

記憶

・雁

老人の失くす記憶を集めている神のおわずや臘梅の花
 落葉樹の葉を落としたる庭の隅冬のころを分かつ臘梅
 山にすむオコジョ捉えて追う画像居ながらふつと愛しさを呑む
 九本のヒマラヤスキのグラウンドに正月の球カキーンと飛ばす
 遠き音澄みてとどけり廃校のグラウンドに夫と二人のゴルフ
 ヒマラヤスキの大きな穂果の撒く種は松の苗かと春には芽吹く
 ゴルフより帰りのみやげ足元にヒマラヤスキの針三、四本

小泉泰清

十一月八日

・う

はるかなる開戦の日のおもい出はまちにひびける軍艦マーチ
 戦争が始まったかと思いつつ、高ぶりもなく登校いそぐ
 小学の三年生にて米英と戦争はじまる教師高ぶる
 太平洋の地図を広げて占領地、日の丸シールを貼らせられたり
 勝ッテクルゾ、此処はお国の何百里、日の丸振りふり兵隊送る
 開戦の翌年小四、米機来る勝ちいくさのわり空襲はやく
 高々度定期便とてB17、つばさ光らせ青空に映ゆ

小西美智子

かしまの一本松

・大

嫁ぎたる叔母の住み居し鹿島町祖母につれられ行きし日のあり
 蟹をゆでるにおいたちくる浜の家そのにおいのみ今に残れる
 海の香をはじめて吸いし松原はかしまの防風林でありしか
 郡山の方にB29が飛び行くことわごわ見上げし幼かりし日
 松原の数万本を曳き去りし巨大津波の力思うも
 この土地に松原ありきと証せるたった一本残れるクロマツ
 津波にも耐えて六年立ちおろし一本松もついに枯れたり

小林能子

みなとみらい21

・羊

横羽線出口にちかく舞ふ鳥の餌場も「みなとみらい21」地区
 いまは昔の国際遊技場計画は戦後の横浜復興を賭け
 領事館跡のホテルのオークビュッフェ深紅の薔薇の一茎を掴き
 ロビーの壁に領事館の写真 神殿のごとく優美にE氏を頼たしむ
 歌ひ囃し陽気な外人一行とことばを交はす「戸田平和記念館」前
 病室より見ゆる展示場さういへば野菜直売会もあるなり
 瑞穂埠頭に立ちし風車が回りをりゆつくりと市民の夢に与かり

近藤栄昭

埼玉へ三

・福

土跳ねるミニ耕運機を押して行く柔らかな畝乾き崩れる
 十坪の陽射し強まり菜園の草取りに倦むいざるに疲れ
 福島の野菜コーナー懐かしき岩瀬キュウリに南郷トマト
 大奥跡芝生に寝ころび耳すます東北人の遠き世界に
 求めればあるもの全て得られそう榛名の頂上の果てなしのむこう
 熊谷のベジタブルマラソン走る子ら埼玉人化しだいに進む
 雨煙り山並み見えぬ十五階目を凝らしている方位赤城山

近藤芳仙

まるく浮く

・信

くらみゆく稜線に点をうつやうに月のほりくる黄色くまるく
 青がすむ東の空をのぼる月たなびく雲をあかくそめつつ
 街の灯をふかんしてある月まるく雲居に青き光をのぼす
 名月をスマホにうつし子に送る季のうつりを感じてほしい
 名月にことよせ送りやるライン息子はインドより暑きこといふ
 「北」のうつミサイルのあり列鳥の上空に見る月は静かぞ
 Jアラートにまた起こされてミサイルが飛んでくるぞとおどされてゐる

柏原宗一

金色の斜光

・羊

道路わきの雪このままなれば三倍になると言ふやがて冬の雪積む
あけ方の今朝の空気やきりりしやんとしておのれをみつづくるのみ
金色の斜光は常にふりそそぎ夢みるごとき一瞬のあり
手袋をしつかりとはめ右手には買物袋を肩よりさげて
唐突に吹く風あれば春一番のやけにみだれて雨戸を叩く
すこしづつ蝶のねぐらをかいま見んけさは左に午後は右手に
敵しい寒さのみが手足をさいなめばただいたづらにたへしのぶのみ

坂上直美

世界情勢

・天

蝌蚪生るる無限に生るる山奥の暗き沼より災いのごと
スーチーに面影かようと言われしが昔うれしく今はかなしき
一言に風吹きしくエルサレム嘆きの壁より世界崩るる
父母や妻子のあらん北の海漂い着ける幾人の骨
教室に入笑わせし少年の北へ帰りて行方知られず
空墮つを恐れ滅びし国ありき今空墮ちて滅びる国あり
空青く風も吹かざる冬の日の静けさの中に世界滅ぶか

坂出裕子

落葉

・洛

白き花咲かせたりしがくれなゐをふかく燃えたつ秋のゆふべは
音たてて落葉踏みゆくたのしさにひとめぐりする公園のみち
賜はれる幸とぞ思ふ音たてて落葉踏みゆく光のなかを
かさこそと落葉踏みゆき透きとほる光のなかにはづむころか
道の辺のみち踏みつのおのづからころやすらふかるき葉のおと
公園の落葉音たて踏みしことけふのひと日のしあはせとして
雨に濡れくれなゐのいろまさりたるもみぢ散りゆく音もたてずに

佐久間 晟

日葉(八)

・湾

ここに居る佐久間晟とは誰なのかそれを求めて今日も生きてる
余白多き佐久間晟と連れ立ちて「私」を探しに今日も生きてる
九十歳はすでに過ぎたれど妻がおり家族が居ればなかなか死ねず
たち向かう師の亡き今は茫茫の砂丘を独り彷徨う思い
なせ生きる。こんな愚問に苛まれ愚答を探す閑人なのかも
生きることにやや疲れたればゆっくりとあの森陰を行きてもみだし
死ぬ、生きる。思い続けて今日もまた寄り来る人の為にも生きる

佐藤道子

惜清水公子様

・甲

歌友五人次々去りてさみしきを昨日又一人幻となる
「入院後とんどん病状悪化す」と友の訃報に絶句すしばし
看取り終へ今が一番楽しきと猫と暮しし友逝きませり
我よりも一つ若くて健やかに朗らかなりしを手本とせしに
会場に疾く着きまして笑みて待つ友の姿よ永久にあらぬか
前向きに生きると笑顔の友なりき会へば話の弾みしものを
早々と歌が届きて今月の歌楽しみとふ文を残して

椎名恒治

本

・橋

目の前の棚に並びてわれを呼ぶ背文字よ著者よ別れむとす
引抜きてまた箱に入れ棚に差し別れむとす棚もろともに
大き箱に太き文字の『百歌人』わが肖像はなし説明書けど
立松和平著『水晶の死』ああ幾人の魂光る
『定家明月記私抄』よ堀田善衛の帯そのままに
棚の外まで積まれ積まれて『全歌集』群わが背文越ゆ
これは第二十一歌集とぞ『満月』を処女歌集と並べ取めぬ

鈴木結志

妻の功德

・福

乙女時のそろばん大会優勝を称うれば妻ははにかみたりき
孫曾孫にまで旅仕度されし妻永久の別れの安らぎ祈る
生生世世されど悲しも妻の骨竹著にはさみ別れを惜しむ
齋場に供花あふるるわが妻の生前の功德偲び見つる
詠雲院結室妙己清大姉位につき妻は受戒に入りぬ
み仏の慈悲や公孫樹の黄葉の天染めて燃え妻の送り火
杉化石肌を生えたる苔の花妻のみ霊の浄土か醸す

世木田照比古

検査

・茜

螢火のごときを光りにボタン押す緑内症の検査も一度目
視野検査の結果は異常と図示されるコンピュータに付度はなく
虫歯ではなけれどすでに役立たぬ抜かれし奥歯の裂け目見ている
突然に音を喪いしわが耳に耳鳴りのみは変わらず響く
コーヒの香りがいずくか消え去りぬ鼻うごめかせ必死に追えど
匂う筈の漬物に鼻近付けて臭覚失いしにようやく気付く
眼科歯科済ませば明日は耳鼻科なり検査検査で師走流れる

関根榮子

日溜り

・埴

冬の日の喜びひとつ束の間の氷光れりシモバシラ草
庭先の武人の埴輪も古りおりて苔青々と纏いしあわれ
友三人はかなくなりしこの年よ賀状したたむ手を休めたり
取り残す柿は子守り柿という日溜りにしてたむろする子等
暮れ早く明かり灯せば収穫の白菜抱えて夫の帰り来
秋の日の暮れ早ければふと思うつるべ落しの釣瓶も恋し
昭和より平成をまるごと生きし吾も御退位の日の決まりしを聞く

関根和美

鍵鞘炎

・埴

右手首かばえば右肘右肩とやがて痛みは右膝にまで
「どっこいしょ」母娘そろいのかけ声に脚の痛みをかばいつつ立つ
遠来の客なき今年のおせちには縁起ミニマム好みマキシム
面倒な小羊はやめん八ッ頭三つもむけば鍋はいっぱい
英国は雪降りやまず動画より息子夫婦の息しろくたつ
母さんに聞かせたかったと聖なる町に響かうお告げの鐘の音
桜咲くころにはひととき帰国すと元旦メールは祖父母に約す

高尾恭子

長居公園

・大

何こともなかったように一夜明けヤンマースタジウムに公孫樹が似合う
どよめきは昨夜の夢か群を率るハシブトカラスの声ただけし
いい夢を見たのだろうかアリーナにベットポトルが転がっている
木の下に盤を囲める老いびとの背まるまると冬日をかえす
ひとところ日だまり白し誰が思い届けんとして十月桜
はりがねのような少女の背ゆれてメタセコイアの並木に消えぬ
ユーカーリの木末うごかぬ鳥青く逢魔が時のまぼろしを見つ

高津砂千子

枯れ草

・風

一月の一級河川ひろびろと藍色たたえ流れゆくなり
やや風のつめたきも身にこちよし枯れ草に坐す正月二日
銀輪をひからせてゆく少年の背きジャンパー風をはらめり
ゴトンゴトンゴトゴト 電車が通り過ぎ鉄橋に元のしずけさ戻る
山けずり立つマンションを眺めるわれを見下ろす人のあるらん
後ろ向きにジョギングをする人のあり枯れ色ひろがる真昼の河原
ひとことに言うはたやすきことなれど枯れ草さえも一色ならず

高橋和代

指輪

・桃

田土才恵

夜の海

・宙

左より右手に指輪移ししもまだ落ちつかぬ細れる指よ
 定位置より二度も移してやうやうに右中指に収まりくるる
 自がための三度の食事もほとんどを取り寄する身の力落ちゆく
 健やかとは遠きこの日「風邪ぐらゐ」との浅はかさ 元凶なりし
 次女の家も近く二人目の孫生るる新年早々 曾孫四人よ
 早ばやと予約なしめて孫、曾孫そろふ食事に淋しさ吹き飛ぶ
 正月とは楽しきことよ ぬかるみを行くがの病む身も華やかに過ぐ

竹下妙子

凍つる日

・霧

虎谷信子

陸月たつ

・伴

黄の蝶の舞ひるごとく散りゆける銀杏並木の下をし歩む
 里山の杉に絡まる烏瓜命燃ゆるか緋の色なせり
 しぐれ降る薩摩路の旅にくれなるのイロハもみちの震へてゐたり
 凍つる日の花胡椒の真紅の実冬陽浴びしが思ひは知らず
 椿の葉濡らせるのみに過ぎゆける時雨のいろの寂しかりけり
 冬水はひそけかりけりゆつたりと川の底ひを光りつつゆく
 ぴーぴーと鳴いて薬缶の湯の沸きぬ鳴かせておいてスクワットせり

田土成彦

通販

・宙

中島央子

級友

・森

塩鮭の辛み薄れる半世紀 流通 経済 技術からめて
 抗生剤ホルモン牛に投与して搾り取る乳の安くなりたり
 アスファルトを時雨が濡らしゆく時間物語りめく事にあらねど
 通販で買ひしボールペン一本が夕方届く送料無料
 うんざりとするほど咳をして過ごす薄明まではあと三時間
 眠れないなかなか眠れないと言ひふと目覚めれば朝が来てゐた
 さきがけの鳥が鳴いて鵲がなき明けの茜は極まるらしも

にわか雨降りくる冬の入り口を明るくともすタワーの赤さ
 この海に漂いやまず浮き沈みしつつしがらみ解けゆかぬまま
 氷雨降る海のかなたへ消え失せよ由々しき思い今日をかきりに
 けぶりつつ港の夜は時刻む過ぎこしものを闇に沈めて
 点描に船は灯りて移りゆく雨の港に入り来るしほし
 昼赤きポートタワーと見て過ぎし幾年を経て今宵上れる
 指す方の闇に拡ぐる紀伊水道間近くみえて親し夜の海

石台のとどき定位置 陸月たつ。七福神の 絵巻も古りぬ
 年神棚まつる術なく 恵方にむき、みあかし立てて拝みにけり
 今はもう使はぬ カマドふき清め、荒神まつり 若水供ふ
 琴の音など流れてゐしもかつての日は年明けテレビの相も変はるや
 何とまあ さうさうしきよ紅白の、しつとりきかせてよ行く年の唄
 新年の珍事と云はな 小狸が、猫の餌皿をあらしゆきたり
 何処より来たのか 小狸餌袋を土間まで引きずり荒しゆきしよ

知らぬ間に友の逝きたり従兄また喪中のハガキ日毎告げくる
 みちのくの「霜柱」といふ菓子子のやう消えゆきし友かとおもふ
 大井川鉄道の旅果せず友の笑顔に白花たむく
 あるがまま在るのが良けれ八十を越えて八年ひとことのやう
 八十八歳よもや生くると思はざり夫も弟も叶はざり生
 辞書にある老女・媼は気にしないプールを歩き三百米泳ぐ
 古里の庭に群生ふ水仙の白に触れつつ告ぐる憂きこと

中島義雄

風挽歌

・岡

潺湲と川は還らずながれゆき風今日も止むことのなし
 〈海に出て風帰るところなし〉 十万億土を妻よどこまで
 〈風の果てはありけり海の音〉 畢りの声はただ「ありがたう」
 〈凧や目刺しに残る海の色〉 目覚めて妻よわが目刺し焼け
 香華などクリスマスにはそくはねど香よりほかに焚くものはない
 夜を込めて打つ風音の荒涼とキリストも仏陀も一閃の光
 荒れ荒れし風落ちしあかつきの乱れし髪を梳く櫛を執れ

萩 葉子

緑のマフラー

・銀

定禅寺通の歌会 穏やかな佇まいの本木定子さん
 入社の頃の思い出 斉藤しげすさん入ってくるなり「おこわ」
 尼寺の夏季練成会は賑やかなり大きな声で歌に沸いた
 昔むかしを積み重ねても会えば昨日の本木定子さん
 昼までは雨つづくらしお出掛けの予定を変えて文庫本読む
 コート内の緑のマフラー紳士物こだわり持ちて探したマフラー
 風やんで急に寒さがどときた綿入れ袷天の衿元合わせる

白子れい

討ち入り

・洛

野おもてはうつつすらと霜水面には水蒸気たつ今朝の散歩路
 友逝きて二か月余りはや過ぎぬ曼珠沙華のごと燃えたるひと生
 未だ明けぬ道の両側初雪の光りていたり討ち入りの今朝
 深き四十七士をたたうるか明けざる野道に初雪の積む
 なべて葉を散らせし細き楓の枝さくら咲くかに乗する初雪
 流れなき疏水の底に身をちぢめ佇つ鷺一羽にわが姿見る
 人生の坂のいくつを登りつめいま吾は佇つ 吹くは木枯し

ばばりょうこ

焼きりんご

・鹿

わが家を襲いし赤き集団のいくつかを甘き焼きりんごの刑
 やきりんごは口中にやさしも朝夕を青磁の皿に香りたじよう
 たましいの揺り籠ならん黄は降りて風にゆれたる十一月の樹下
 銀杏木は葉をそぎ落し空を指すおゆびの形ふくらみて立つ
 虫喰いの一葉みごとな色なればプローチをつけるあたりにかざる
 呼ばれたる診察室にその声の温とさのお顔わたくしの主治医
 むくとさに誘われ答うる或る時は拗ねるようなる言い草となりて

浜谷久子

師

・地

綿密な年表・事典の後世に資する書誌学成して師は逝く
 足跡を確かめ追って光当てる浦西和彦の作家年表
 テキストは梶井基次郎「檸檬」文庫本若き助教浦西先生
 退官の公開講演教授陣も聞き入る「葉山嘉樹の転向」
 動の静師は谷沢永一と浦西和彦学生われら
 谷沢教授の書評の白熱迫真に購入増える難解書籍
 大学との縁の終焉思わせる恩師逝去の大きな別れ

浜本芙美

巻耳

・夢

巻耳の根方に蓬のやわやわと伸びる歩道の春を歩みぬ
 門扉しめんと仰ぐ天上雲出でて光る半月に兔のおらぬ
 「早春譜」おのずと湧きくる並木路はかなき声を風に晒しぬ
 なんとなく春の匂いのする朝雲を両手にのせて息吸う
 吹く風の寒い日温い日細い日細いながら春へと向かう
 雨にぬれプランターの土くろくろし春の花苗待つさまにして
 アーキペラゴと称さるる此処に住み本当は何も感じていない私

檜垣美保子 家守

・晶

なにもかも白に統一されている部屋の窓には遠景の森子の住まうシンガポールの公団の十三階なり家具三つのみ冷蔵庫ひらけば餅と乾麺と納豆六箱 日本のあり永住権得たるをきけばこの国に子をとられたる心地すすこしま白なる壁の角には愛らしき丸き目をもつ家守いっぴきハチドリが空中にいてまばたきのごとくはばたき蜜吸う夕べ子の部屋の家守を写し日本へ連れかえりたり雨季の国から

福田庸子

ダムなき川

・今

いくつもの蛇行重ねてくだりきし四万十川は石まろらかに蛇紋岩まろく摩られて大小を埋めつくせる河原に立つまろびつつ水にくだりて積もれるを石のおもてのぬくみに触るる豆粒と摩られし石を選び分けて磁石につける遊びに興ず見上げたる床板の近さに身を縮め沈下橋真下をくぐりぬけたり四万十の水にふれつつ水底の石のきらめき冬に入る日よ蛇行はげしき流れの上を見さくればダムなき水の澄みきはまれり

藤川和子

晩秋の空

・眉

干柿を食ふるまなうらギラギラと柿の若葉があぶら照りせり干柿は和菓子の甘味と老舗の言 昭和ひもじき世代も老いぬ井戸端の実生の柿の木晩秋の空に捧ぐる明るきカーキ色陽に透ける熟柿をねらふ鴨と今かも落ちむと見守るわれとふる里は常いたはりくるるもの知人隣人みな他界せし拾はれぬどんぐり踏まれ弾かれて何故か樹下に集まり来たる墨滴の太筆勢ひ「北」一字更なる緊迫年越えむとす

藤田美智子

月の光

・新

眼鏡の奥の瞳小さくなりてゆく課題出さぬを強く叱れば身を寄せて浅瀬に眠る白鳥のひと群れば月の光を集む福島を出でて〈温度差〉を実感す福島は雪東京は雨ほころびを縫はざるままに置くことし原発のことを語らざる日日雪の野に直ぐに立ちゐる刈萱の穂はどれもみな風下を向く統一の日まで祖国は訪ねぬと決めるる友の歌ふアリラン思ひきり泣きたるのちに食ふならば会津山塩羊羹がよし

船田清子

冬空の青

・天

一面の冬空の青陽光に乗りてしいーんと脳へ注ぐ世はなべて事もなしとや冬空の一面の青あつけらかんとこの背に放物線上黒点の北より延びて戦慄を呼ぶ「危機に備ふ」大義名分堂々と国の舵取りはやも決まるや大阪の空にも師走 電飾の灯るやと見ゆ老いの眼ながら押入れに陣取る古き軸物にトロフィーなどなど行き場かなしきミヤオミヤオとなく仔を連れて「クロ」に似る猫めぐりゐる呼びたるや君

牧雄彦

訣れ

・大

初めての駅に降り立ち斎場へ向かふ人らの後につきゆくこの夏のともひるめし摂りたるが最後となりて今は訣れむ自らも納得せぬまま逝きにしか常とかはらぬ顔に訣れぬ半世紀の君との交はりここに終ふ秋の日浴びて駅へ向かへり葬りの場二十年ぶりに会ふ人の笑顔を見ればややに救はる斎場を去りて駅への道すがら生きゐるわれはめし屋を探ささやうなら永遠の訣れのあとわれは腹空きたれば天どんを食ふ

松浦禎子

書写山

・羊

西国の二十七番札所なる雨の円教寺へ何のえにしぞ

六根清浄かなうる書写の上人へ一首ささげし和泉式部

和泉式部月に祈りし書写山の山影おほる過ぎにし千年

山の端の月の光をまほろしに狭霧の一期山のほりゆく

雨にけふる摩尼殿を過ぎ立ちどまりかの歌塚をはるか拝しぬ

雨の中円教寺までを支えくれし和美さんの熱き心根を受く

参拝の記念にとあなたより戴きし書写山のご詠歌印す手ぬぐい

松永智子

閑

・嵐

あたらしき年めぐり来ぬこゑにすることなく消ゆることばなり見ゆ

ものいはぬひとひ暮れたりひとの聲きくことばなく年あらたまる

笛の音すでに絶えたり陸月ふつかものいはぬまま日の暮れはやし

あたらしき年の音なりにんげんをみることになく夜の窓閉づ

こゑにいだすことばのあらずいさぎよき風の音なり空に消えたり

にんげんの聲とほくして陸月三日暮れゆく空のかがやきに会ふ

深夜なることく笛の音の絶え深閑として聞たたなはる

三浦好博

冬空に入る

・銚

水溜まりをしなやかに跳び雨あがる冬空に入るソーレもう一度

誕生日に寿司屋に來りて眼鏡拭く後期高齢入りの息かけ

兩戸開け哀しみひとつ迎へ入るる友の娘の計報を聞きて

純粋さは既に失はれてをれど老いし二人の「草の花」論

レストランに単品二つを半分こ老いを生きゐて足りてゐるなり

湯のまちの裸婦像の乳房色変はる触らねばやはり悪からうばい

金婚を迎へし今日も公園の清掃に來ぬ友らは知らず

宮本靖彦

黒瀬海原

・凌

冬雲の乱る隙を洩るる日かげ紀淡の海におとし染めゆく

せりあぐる黒瀬海原見つめつつ洲本漁港に入り船を待つ

雲あそぶ夕空にとび幾羽舞ふ淡路の冬は閑古鳥啼く

西海は黒み勝りて波荒し霞む島影小豆島らし

ゆるゆると壇歩まるる雨陸下尚十五ヶ月の国事の重し

寒波の日同齡ふたりの計報受く片やゼミ友片や山友

あんみつを嘗めてくれしが山友の終のうたげよ遺影を見つむ

三好聖三

雑

・伊

元日は江戸川乱歩の「蟲」を読む人間嫌いの末を見るため

元日は『ノッティングヒル』を観て過ごす〈奇妙な人〉を味わうために

凍雲をくぐっておおきな月が出る正月二日の望月である

戦略は気分で左右されていたインパール作戦の記録を見れば

ゆっくりと南下してゆくタンカーの右舷を赤く燃やす落日

行く船にスエズ運河を夢想するジブラルタルの〈橋〉の在りかも

ポール・ニザンはエマニエル・トッドの祖父という記述ありたり新書の半は

御代田澄江

御苑秋色

・茨

忠臣蔵テレビに映る江戸城の大石垣に我も触れ来ぬ

東御苑野外セミナー大手門くぐれば樹々の秋色深し

案内歴六十年とふべテランの説明滑らか激みもあらず

満開の十月桜に迎へられ松の廊下跡大奥跡と

香淳皇后御還曆祝す桃華菜堂類ひなく麗し心奪はる

国中より集まり來たる貴樹珍樹行き届きたる説明も沁む

手を引かれ江戸城東京息子と巡る島倉千代子の唄も親しく

もとむらしげと

暗い影

・そ

横田敏子

雪の上の影

・福

核保持は自衛の権利といふ国を一斉に批判す核もつ国は
削減の努力せずして持つなといふ弱みはないか鎧の下に
線引きのかく難しき「自衛権」敵基地攻撃は戦争の始まり
「核のボタン机上にある」と「俺の核はもつと大きい」虚しき応酬
敵を煽る応酬つづきて戦争の暗き影頭つ遠き過去より
ミサイルを飛ばす国あるを理由とし防衛費は史上最高となる
金を出し謝罪もしたのに覆さる本音が透けたか慰安婦合意

八乙女由朗

百舌

・柴

吉内尚彦

ミスアオイ

・浜

越冬に備うる食を求むるや寄り来て視線投げける百舌は
日本海に落とせる命か夜の更けを山越えし風の雨戸打つ音
暮れ、正月に逝く人ありて僧忙し手酌ににがき酒酌むは常
昼寝するは老いの体力戻す時尺度の違いありて有体
飛び退かぬ鳥の四、五羽残りいて見送る見れば自然なるべし
コメの産地にあらざる国を米国と言ひて恥じざる民とし思ふ
若き日に盆栽売りから購ひし黒竹なりきいま藪となす

山下雅子

平和

・習

吉永惟昭

賀正

・熊

晴朗と迎うる元旦いくさ経て七十三年の平和いとおし
元旦のダイヤモンド富士燦々と八十余年の身心に照る
鎌倉のハトポツポサブレ舞い来たる児の誕生日平和に痺る
錢苔の豊けきみどり踏まれても踏まれても庭を席捲しおり
道隔て手を振る笑顔誰ならむもたつく脳なぐなんと歯がゆし
善し悪しを超えてしまふか政権の数の力の一強怖る
唱和する「見上げてこらん空の星」九ちゃんあなたは生きています

初氷あさの光に反射して閉じこめられし落葉がひかる
吹き溜りの枯れ葉に紛れる黒揚羽夢はいずこそ見る影も無く
ちまちまと家事を済ませて座る椅子ガラス越しの陽こんなに温し
開ききる薔薇が音無く崩れたり 一瞬に来る地震の揺れは
体調も心も萎えているわれにメール届きぬ然りげなく今日も
初雪は風なくほっこり積もりいて会津の冬が目の前にあり
冬の陽にまぶしく光る雪の上のわたしの影に両手を振りぬ

環境庁指定の絶滅危惧種たりしミスアオイなりわが宝物
日に三度見守り十年育て来しミスアオイ咲く秋空色に
ミスアオイは一年草にて年々に種を蒔かねば蒔かぬ種なり
ミスアオイの種無き鉢に氷張り枯れし莖あり初冬の庭に
ミスアオイの種は芥子より小さくてウの目タカの目にも止まるまじ
県内の植物園にミスアオイを保護栽培すと友より便り

再びは来ぬ平成の戌の年水仙をのみ飾り迎うる
忘却の彼方よりきしこの賀状秘めごとなきになに忸怩たる
彼ならん差出人の白きまま寿くるる賀正ふた文字
年々と減りゆく賀状越年の計報に重ね輪ゴムで止むる
この絆多士済々の囲みいる部活OB集う新春
結成す七十年前過か過ぎ会員千余思ひ一入
水仙は倒れ咲けども潔し もたぐ白花土うちに鳴る

朝井恭子

初詣で

・森

常磐木の疲れをみせて杉の木は社の森に寒々と立つ

元旦の氏神様に列なして庶民われらの祈り切実

元日の氏神詣での長き列宮川の橋を埋めてつつく

注連繩の真白き四手の下くぐり初詣でなる心張り詰む

曾孫の二人も加わり囲む卓女系家族の夕餉にぎわし

うから等の帰りのちを独り聴く無伴奏なるパッサの組曲

破れたる団扇のさまのモンステラ窓辺の日差し独り占めする

飯田 勤

獅子舞

・む

冬枯れの植木畑の寂しさよ残りし木の葉が風に震へる

黒々と畑中の道続きたり朝日を浴びて荒草光る

朝焼けの空渡り行く鳥の影二羽連なりてビルを越えゆく

街の空ひとときは高く突き出たるはしごは消えてビル建ち上がる

膝を病み階段登れぬ身となりて貫井の神社家より拝む

笛の音に太鼓のリズム軽やかに今年もめぐる貫井の獅子舞

おはやしに合はせて踊る獅子舞の開けたる口に祝儀投げこむ

磯田ひさ子

連衆

・森

年賀状もどりて来たり転居先不明の印を赤く押されて

平成の神隠しがないくたびも「コノオテンワハツカワレタイムセン」

にんげんの生死分かたぬ不自然に慣れゆくわれか突き止むるなく

二十年歌仙を巻き来し連衆の二人逝きたり一人は病みて

連衆とはるあき歌仙を巻きしことわが平成に得たるさいはひ

歌仙は巻くメールは打つ簡素なる動詞があらたなる意味を持ちたり

この世から消えてしまひし幾人かを忘れぬやうに今日は寄り出す

市原志郎

見る

・萬

同じ事して一日過ごしたりと思うなり今日日曜日なれば

間もなく見えなくなるそんな恐怖を今日もしている

正月の仕度をと広告を見ておりぬ妻よ時にはゆっくりとせよ

あと何回歌をしたたむ賀状かと思いつつ日暮るる窓の辺に居る

うっすらと光のみ感ずる左目に夜の室内見まわしている

右の目の視力低下を恐れつつ角膜移植の左目かなしむ

しばらくは歌も忘れて居たりけりふと日日反省も忘れておりぬ

奥田清和

水路

・大

手に触れむばかりまぢかに拝したりかの石上の七支刀

石上宮の司は静雄師の昵懇なれば時空をつなぐ

長田なる宮の司は邦雄師の教へ子なれば迎へくれます

二百回記念歌会は肅肅と営まれゆく師弟同行

三百回記念の歌碑は進師の呉服の宮の子らを詠むうた

呉服なる歌碑の宴席に山本友一磐梯讃歌

見の限り茅渚のうなさかみをつくしきながら追へや水路かがやく

奥田陽子

貝殻

・羊

曇る日の窓のあかるさ黄葉の榊が占めて降りつもりゆく

エミール・ガレの花器に刻める水仙の深きいろもつひらかんとして

梳きてなお抜け落ちやまぬ髪ありて窓のむこうの青は海らし

みずからの血潮のごとく波ひびく海ちかき母の家に睡りき

拾い来し貝から瓶に鎮もれど今宵は縁の月に濡れいん

〈海に行く〉せがみいる児の手に握る砂場にありし白き貝殻

盛りあがり寄せくる絵本の波あおくいまだも海を知らぬおさな児

小野 雅子 新春 羊

足首をあたためればこんなにも幸せになる師走の夕べ
 サンタクロース翔りゆきたる満月のおもてかがやき新しき年
 満月のスーパームーンこの年の一月二日空晴れわたり
 冬の木を透きて見放くる眼光のごとくかがやくスーパームーン
 山の形くつきり見せて箱根町いま駅伝の若きを放つ
 翌日は歩けぬほどの脚なりきとかつての勝者こもこも語る
 戦争を危惧してゐると年賀状に書いて来たるはひとりならず

久我 田鶴子 歳晩に 羊

鎌倉は八幡宮の池の辺に台湾リスに餌づけするひと
 好き嫌ひ明らかにしてクラッカー出すまで待てり台湾リスは
 鳩たちにカッパエビセン、子栗鼠にはクラッカーをやり、ものは言はない
 おねだりの子栗鼠がひよいとこのほり来し瞬時といへどわが膝のこと
 梅の木の冬の枝ぶり目にとらへ あ、あ、あ 杭に激突ノ
 出た杭を打つや撃たる身のほどの悔いと言ふべし歳晩に来て
 ボクサーの強打にのびる擬似体験 唸るばかりにしばらくはあり



現代歌人協会 公開講座のご案内

ザ・巨匠の添削 ～添削から探る歌人の技と短歌観～

斎藤茂吉、佐佐木信綱、北原白秋、窪田空穂、
 与謝野晶子、土屋文明、近代短歌の巨匠たちは
 弟子や投稿の作品にどのような添削を行ったのか。
 添削から歌人の創作の秘密に迫ります。

- 第一回 4月18日(水)
 「斎藤茂吉」 講師・小池光 司会・石川美南
- 第二回 5月16日(水)
 「佐佐木信綱」 講師・佐佐木幸綱 司会・梅内美華子
- 第三回 6月13日(水)
 「北原白秋」 講師・高野公彦 司会・奥田亡羊
- 第四回 7月18日(水)
 「窪田空穂」 講師・篠弘 司会・後藤由紀恵
- 第五回 9月19日(水)
 「与謝野晶子」 講師・松平盟子 司会・笹公人
- 第六回 10月17日(水)
 「土屋文明」 講師・大島史洋 司会・内山晶太

会場 学士会館

時間 午後6時～8時(受付開始)5時30分

聴講料 前売り六回通し二六〇〇〇円(三月末締切)

*お申込みは聴講料を添え(現金書留または郵便為替)、3月末日までに左記宛にご郵送でお申込ください。聴講券をお送りいたします。

*一回毎の聴講をご希望の方は当日受付をいたします。(二五〇〇円)
 *現代歌人協会会員は無料です。

〒一七〇一〇〇三 東京都豊島区駒込一―三五―四一五〇二

現代歌人協会 公開講座係

つぐみの歌

(『木曾川』より)

わたりきて落つるははかな草のうえに透きたる 腸紙はらわたのごとしも
冬つづく木の間の網に死にゆけば瞳にちいさき日の輪のひとつ
衰えし視力がつぐみのさながらに透きとおりゆく空をみつむる
なにさそう冬のおわりの小鳥の爪つけねに小さく肉もりあがり
黙しつつかしやりたるのちにしてわが掌てがつつむ遠山のおと
ほうほうと捕らうる一団のひとりにてわれは木の葉と枝を集むる
くだりきし幾羽がかかれる絹の網のしないのなかを日輪ひは流れゆく
死にゆくは鳥のみならずうっすらと日は冬ぞらのみどりを縫えり
ああ死ねと告げくるような時のうしろにかならずつづく一瞬があり
ひとつの死いとおしむとき棉花のごとしろき翼のうらの毛が映ゆ

今月の二人

国宝展から大聖寺へ 岡野 恵俊

国宝の観音菩薩に会わんとて二時間並ぶ東山裾

国宝の阿弥陀の前は全国の言葉まじりて讚歎さるる

うすぐらき博物館に仏のみ光をあびて端座したもう

国宝の仏の前は人の山背のびして過ぐ矢印に添い

全国の人を集むる国宝仏ふり返りつつ御前を過ぐる

御仏に護られ博物館を出る心はぬくし夕陽を受けて

御仏の徳にひたりしひと時を心の奥にいだきて帰途に

大聖寺一山あげての茶会あり孝淳皇后の徳をしたいて

皇室の御物並べて迎えられ一服の茶の味わい深し

招かれて庭石わたりお茶室へうすぐらき中点前のすすむ

蹲の水に沈みしもみじ葉の赤黄あざやか小鳥水のむ

床板のいたみあちこち見つかりて寺は大工仕事の絶えず

人格の完成めざし生くる我ら幾度生まれかわれば成るか

白子先生に出会って

私は寺で育ちました。学校を卒業してから禅宗の和尚さんのところに毛筆を習いに行きました。少しは行儀がよくなることを願っての師匠の指示でした。そこで習字の手本といっしょに和尚さん主幹の俳句誌を頂きました。なんとなく出句して十年ほど経たとき京都の寺に移りました。現在の寺です。

ある時、茶道の先輩である白子先生から「地中海誌」のあることを教わりました。わからないまま文字を数えて短歌らしきものを詠んでいましたが、やがて地中海に入られて頂くことになりました。

私の寺は大田垣蓮月尼と少々縁があります。蓮月尼は歌の弟子である垂水文字さん(当院第十三世の母、歌の名は円月)を当院におき、隠棲の地である神光院とを人力車で行き来しておられたと聞いています。

円月さんは歌も書も上手で、蓮月尼は心を許しておられたようです。また当院では村の人達といっしょに歌の会を催しておられたと聞いております。私が今、短歌を楽しく学ぶことが出来るのは眼に見えぬ不思議な御縁に導かれてのお陰と感謝いたしております。

今月の二人

富有柿

山崎 昭子

十月の思わぬ寒さに震えたり庭には一輪ハイビスカス咲く
 美術展 選挙と歌会重なりて駅では台風の接近を告ぐ
 転倒し両手痺るる後遺症水に触るれば刺すごと痛む
 整形外科の待合室は老人会皆みな口は達者で賑わう
 ピカソ展その解説を読むほどに画家の偉大さ初めて知りぬ
 線描きの幼子の絵の一枚のつぶらな瞳にしぼし佇む
 市民祭わたしの書きし短冊に歌人の仲間となりたる思いす
 自治会が新たに始めしカラオケ部音痴のわれは余儀なく参加す
 お茶係音痴の仕事と思いに許されなくてマイク持たさる
 猪の蒔蓄とくと伝うればバーベキューに人みな興ず
 赤き葉を三枚添えて富有柿を届けくれたり旅する姉は
 つわぶきの花の咲くころふる里の山に柿もぐ父を偲べり
 耳遠き母に近寄りメガホンで話しくれたる看護師やさし

好きこそものの

金剛山の美しい自然に抱かれた楠木正成
 生誕の地が私のふるさとです。病弱だった
 けれども、野辺に咲く草花の中を飛び回る
 蜂やとんぼを追いかけるような女の子でし
 た。

祖母は心静かに書物を愛し、おば達との
 文通にはお互いに短歌が添えてあり読み聞
 かせてくれました。

中学一年生の時、病床の正岡子規の短歌
 に触れ、短歌には少なからず興味を持って
 おりましたが、還暦近く「地中海」への正
 式入会をきっかけに「好き」になりました。
 娘にはいつも「好きならどうして勉強し
 ないの」といわれるのですが、「好きこそ
 もの上手なれ」は私に当てはまる言葉で
 はないということを実感しています。観察
 はできても、それを表現する力、特に言葉、
 文法などの知識に乏しい私をご指導してく
 ださる支社長のおかげで今日まで「好き」
 だけで続けてくることができました。今後
 は良い作品にいっぱい触れ、作歌を続ける
 ことができればと思っています。

やっぱり私は短歌が「好き」なのです。

◆今月の二人・岡野恵俊作品評◆

仏のみ光をあびて

寺で育った岡野さんは、書を読み、茶道も俳句も嗜む。京都の寺にある現在、茶道のつながりから白子さんのグループへ。

・国宝の観音菩薩に会わんとて二時間並ぶ東山裾

京都東山の山裾にある博物館に国宝展を見に行ったときの歌。

「二時間並ぶ」に、国宝展の人気のほどがよく分かる。

・うすくらし博物館に仏のみ光をあびて端座したもう

薄暗い博物館の中に、仏像だけが光を浴びている。国宝展の演出によるものだろうが、薄暗い中に浮かびあがる仏はいっそう有り難いものとして目に映ったことだろう。「端座したもう」という結句に、その思いが滲む。

・国宝の仏の前は人の山背のびして過ぐ矢印に添い

お目当ての国宝の仏の前には、人の山。その背後から背伸びして眺め、矢印にしたがって通り過ぎる。二時間並んで入館した後の現実が、淡々と描写されている。

・大聖寺一山あげての茶会あり孝淳皇后の徳をしたいて

寺を挙げての茶会とは、さぞかし大がかりで立派なものなのだろう。皇室につながる茶会とあっては、さらに。

・招かれて庭石わたりお茶室へうすくらし中点前のすすむ

ここでは、お庭から入ったお茶室の「うすくらし」。明から暗への、一連の流れの中に、お点前がある。

・隣の水に沈みしもみじ葉の赤黄あざやか小鳥水のむ

隣の水に沈んでいる赤や黄の葉の鮮やかさ。はっとして見ているところへ小鳥が来て水を飲む。もう一つ、はっとさせられた作者の心の動きが見えるようである。

◆今月の二人・山崎昭子作品評◆

赤き葉を三枚添えて

評者・久我田鶴子

楠木正成の生誕の地が古里だという山崎さん。病弱ではあっても、恵まれた自然のなかで育たれたようだ。

・美術展 選挙と歌会重なりて駅では台風の接近を告ぐ

実には、旺盛な行動力！ 美術展・選挙・歌会、その上に台風までとは。幼い頃の病弱からすると、夢のような……。

・整形外科の待合室は老人会皆みな口は達者で賑わう

どこかに痛みをもって集まっているのだろうか、みな口達者で整形外科の待合室は老人会のようなようだという。元気な大阪弁の飛び交う待合室を想像してしまった。

・線描きの幼子の絵の一枚のつぶらな瞳にしばし佇む

前歌に「ピカソ展」とあるので、この絵もピカソの描いたものか。「の」を重ねて、「つぶらな瞳」に焦点を絞っている。

・市民祭わたしの書きし短冊に歌人の仲間となりたる思いす

短冊を書いた短冊を市民祭に出品したのだろう。それを眺めて、自分も歌人の仲間になった思いがしたと、素直な詠いぶりに短歌を楽しむ心もうかがえる。

・赤き葉を三枚添えて富有柿を届けられたり旅する姉は

旅好きの姉のお土産だろうか。届けられた富有柿に「赤き葉を三枚添えて」というところに作者は、姉らしさを感じたのかも知れない。姉妹の間に通い合うものが感じられる。

・つわぶきの花の咲くころふる里の山に柿もぐ父を偲べり

姉の届けてくれた富有柿の歌に続く、この歌。柿は、「ふる里の山に柿もぐ父」を偲はせるものでもあったか。姉妹に共通する、ふる里や父への思いもあるにちがいない。